

分離派建築会

メンバー図鑑

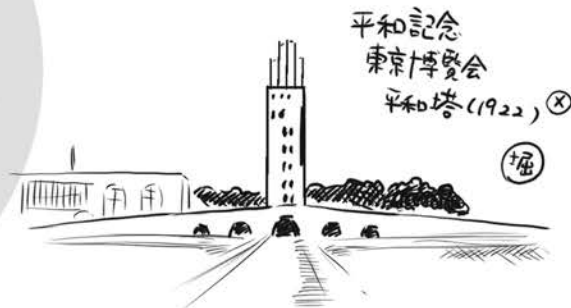
堀口捨己 (ほりぐち・すてみ)

1895年生 岐阜県出身

● 審美眼が鋭く、分離派建築会の理論的支柱。
数々のマニアックな美術・建築知識をもって
分離派建築会の思想を先鋭的に導いた。



- ⊗ … 現存ない
- ⊙ … 現存
(再現含む)



平和記念
東京博覧会
平和塔(1922) ⊗

堀

⊙ 小出邸(1924)
東京都江戸台2丁目 移築
・現存

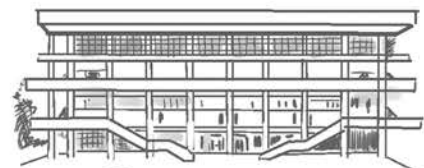


堀



紫煙荘
(1926) ⊗

堀



⊗

⊕ 明治大学 和泉第二校舎
(1960)
他 明治大学 駿河台校舎、国書館
生田校舎など
(一部⊙)



石本喜久治

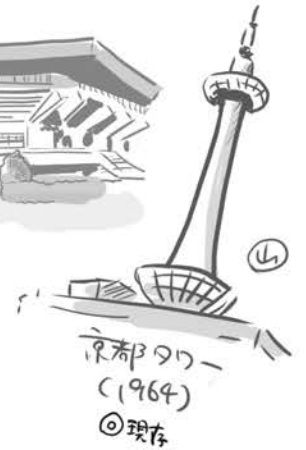
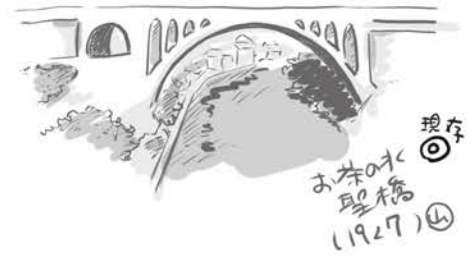
石本喜久治(いしもと・きくじ)

1894年生 兵庫県出身

●大阪市の銭湯の養子として育つ。
押しが強めで実業家肌。

分離派建築会を白木屋に導き、
世間に注目させたのは彼のセンス。

当時既婚者だったことはあまり
知られていない。



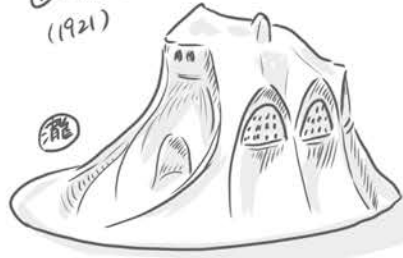
山田 守(やまだ・まもる)
1894年生 岐阜県出身

●初期のお茶の水「聖橋」から晩年の日本武道館・京都タワーまで曲線を用いた建物のルーツは分離派の活動による。

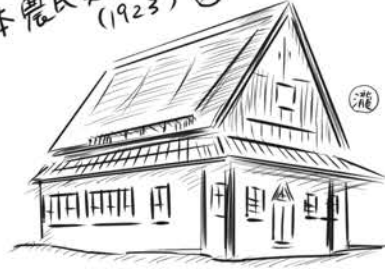
自分が良いと思ったら、どこまでも貫き通す馬力の持ち主。

人付き合いの中では、持ち前のユーモア(多くは駄洒落)で場を和ます。

山の家(模型)
(1921)



日本農民美術研究所
(1923) ⊗



滝澤真弓



滝澤真弓(たきざわ・まゆみ)

1896年生 長野県出身

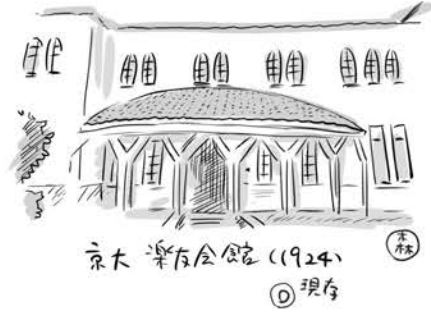
●鼻っ柱が強く、分離派一の論客として知られる。

芥川龍之介とは高校の先輩後輩の仲で、帽子を譲られるほど親交が深かった。好奇心旺盛で猛烈な読書家。高じてのち研究者の道に入る。





森田慶一



森田慶一(もりた・けいいち)

1895年生 三重県出身

「構造」選択組ながら分離派に参加したが、そのいきさつが、全く記憶にないと語る。

一方、構造を選択してはいたけれど、デザイナーの腕を磨きたいと思っていた、とも。

のち、京大に奉職し、代表的な仕事となったローマの建築家・ウィトルウィウスの研究の萌芽は、分離派時代に芽生えた。

清水ビル「イ・7」(1930) ⊗



旧高岡電燈本社
(本社会館)(1934) ⊗



矢田茂

矢田茂(やだ・しげる)

1896年生 愛知県出身

矢田が描いたとされるフタシ



森田と同じく「構造」選択班に属しながらも分離派に参加した。

大学卒業後はすぐに清水組に入社。

忙しい中でも、きちんと分離派展覧会に作品を出展しつづけた真面目青年。

清水組の仕事を通じ、「分離派スピリット」を建築に込めてもいた。

山口文象 (やまぐち・ぶんぞう)

1902年生 東京出身



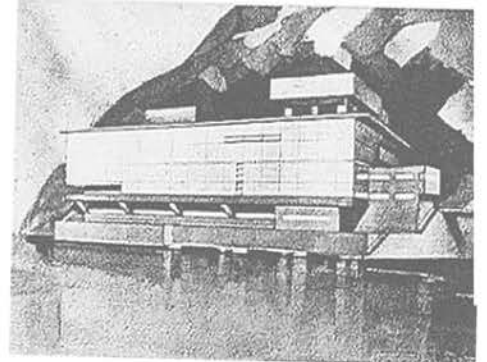
東京・浅草の大工の家に生まれる。
エリート校・府立一中に合格するも、
親の反対に遭い、進学を断念。
父の仕事を継ぐべく清水組に入社、
工事現場で働くが、建築家を夢見て
1920年に退社。
逓信省の製図工から、分離派で才能を
認められたのをきっかけに、さまざまな
人間関係の中から建築を学び、数多くの
建築を遺す。

製図工仲間と1923年、創宇社建築会を
結成し、建築運動もさらに広く展開させた。

山口の自筆パース
※ 画の才能がずばぬけていた
出典: まちり通信 48号
(伊達美徳氏執筆)



① 隅田川 清洲橋
現存



②
現存

黒部川第2発電所
(1936)



聖三教会堂
(1926年)



旧米川正夫邸
(1929年)

葦田周忠

葦田周忠(くらた・ちかただ)

1895年生 山口県出身

山口県・萩の士族出身。

新しい建築についての研究熱心さは
右に出る者がいないほど。

絵がうまく、センスの良い建築設計も多数遺したが、
建築評論・執筆や、家具のデザイン・研究、
新しい工法(乾式工法)の研究などー

いつ寝ていたのか分からない精力的な活動多数。

戦前～戦後を通じ、良き教育者としても教え子から
慕われていた。

晩年には早稲田大学で学位も取得。

最後まで分離派の一員であったことを誇りにしていた。



大内秀一郎



大内秀一郎(おおうち・しゅういちろう)
1892年生 東京都出身

年齢的には一番年上。紆余曲折を経て、学校には遅れて通っていた。

後輩の立場だったが、石本も呼び捨てにできなかったほど、皆に慕われる好人物だったという。

大内の手掛けた、日本初のプラネタリウムを備えた“大阪電気科学館”は、幼少期の手塚治虫が足繁く通ったお気に入りスポットとして知られている。

女性解放運動家の平塚らいてうの親戚筋にあたり、赤ん坊の時、らいてうにおんぶされていた。